

令和 5年 11月 17日

浜田市議会議長
笹田 卓 様

議員名 佐々木 豊治

調査研究活動報告書

下記のとおり調査研究のため視察等を行ったので、その結果を報告します。

記

1. 期 間 令和 5年 11月 13日 (月) ～ 11月 15日 (水)
2. 視察内容
 - ・藤里町社会福祉協議会
ひきこもり支援の取組について「ひきこもり対策モデルの町」
(113人の引きこもりが0人に)
 - ・深谷市 不登校児の居場所「アプローチルーム」について
3. 視察先
 - ・秋田県山本郡藤里町
 - ・埼玉県深谷市
4. 調査経費 92,808 円
 - 内訳 交通費 新幹線 34,440円 航空代 29,840円 高速バス 4,520円
電車代 2,958円 レンタカー・ガソリン代 3,410円 340円
 - 研修費 1,000円
 - 宿泊費 16,300円
5. 調査研究活動の概要
別紙のとおり



秋田県藤里町 引きこもり対策

◆藤里町社会福祉協議会

菊池会長のお話から

- ・福祉の視点は落ち込んだ人を引っ張れば支援と思っていた。
ここで満足してくれるだろうと思い込んでいた。
活躍支援とは、その人らしい活躍ができることで、これをはやらせたい。
- ・冬は朝出勤すると職員は雪かきで、5時からやっている。
- ・1990年から県全体で「一人の不幸も見逃さない運動」に取り組んできた。
頑張れば頑張るほど、不幸な人を世話していれば良いと言われ疑問に。
- ・2002年事務局長になったのを機に、支援する人と支援される人がしょっちゅう入れ替わっていて、されていてもする人になる。
- ・不幸な人をみつけだすことではなく、支援する人・される人どちらでもいいようにした方がいいのではないかと思うようになった。隔たりない運動にしたい。
- ・する人・される人をどうしたら分けられるか。
- ・右手だけで活動できる活動はいっぱいある。だから応援します。
- ・モデル地域で取組んだ「福祉のまちづくり」ではなく「福祉でまちづくり」で取組んだ。
- ・社協は8割が高齢者福祉の考え方。
若者が応援できる若者支援の町にしたい。これがきっかけ。
- ・若者で一度ラインから外れてしまうと立ち直れないと思っている人が多い。しかし、大丈夫、立ち直れる。少し後押ししてあげたい。
- ・補助金を申請したら、若者支援は補助できない。対象者を明確にしろと言われた。
名前を付け明確にした。
- ・引きこもり支援だけではない若者支援で取り組む。
- ・どこまでが若者か。活躍支援といった以上全年齢を対象にすべきではないか。
- ・地方創生の恩恵を受ける側ではなく、弱者が担い手になれる地方創生事業に参入した。
まず、5年間に手を挙げた。
「福祉でまちづくり」で支援される人を隔てないトータルケア推進事業を開始。
開始の会にスタッフを募集し、スタッフ250人。お客さん150人。
- ・みんなでやり遂げたことが大切ではないか。
- ・お年寄り自分で辞めていこうとしたが、シンボルの紫のTシャツを着て活動してくれた。
ボランティアの印になった。ボランティア活動には紫のTシャツを着る。
- ・2010年、「こみっと」をオープンし、活躍支援事業を開始。使ってくれとお願いして回った。
- ・引きこもりの人も外に出たいのでは。家庭訪問は情報提供するだけで、あなたに届けていいですかと、200人以上訪問した。113人がオッケーをくれた。
- ・引きこもりとは学校にも職場にも行ってない人が対象。
- ・社協が来たと家族にお願いも多かった。
勝手に来たら、113人オッケーは驚いた。情報を届けただけ。
この次いつ来るのとの声も出始めた
- ・「求職者支援事業」の紹介も行って、効果も多かった。
- ・ひきこもりは相談援助から始まるのではなく情報提供から。
- ・支援事業を紹介し、給付費をもらいながら訓練する支援事業を利用する人も始まる。

どこ行けばいいの？

- ・高齢者の居場所は一生懸命だが若者の居場所はやっていない。

- チラシを持っていくと頑張ると言う。
しかし、不安になっていけなくなる。ごめんねと。やり方が違うと感じた。
- ・居場所として、シルバーバンクとして地域の仕事に出ていく。
いつ来てもいいよ。
いろいろな人の働くきっかけになっているのでは。
ステップアップではなかった。
求職者支援で自立した人もいた。ハローワークで。
 - ・そもそも福祉の世話にはなりたくないという人が多かった。
 - ・何十年の引きこもり、髪伸び放題。受講する支援活動のなかで一般の人と仲良くなり、自立した人も多かった。初年度15人受講で12人就職。
 - ・夜中に散歩。気になる「こみっと」を必ず通る。
 - ・結構、社協がうるさくしつこかった。一回くらい出てやるかも結構いた。
居場所が欲しくて出てきた人は少なかった。
 - ・変化なしの高度な障害の人には家から出るより、ヘルパーを使ってもらった。
 - ・自分で自分を引きこもりと思う人はほとんどいない。ひきこもり調査する意味はあるのかとも思った。
 - ・平成23年まいたけキッシュの製造販売をはじめ、初年度450万円売り上げた。
住民の見方が変わってきた。
2年後には讃岐まで行ってうどんの修行もしてきたがだめだった。
全国的に引きこもり支援での成功事例は少ない。
 - ・浜田市は浜田市のやり方でやればよいのでは。
 - ・町外の人も来ている。遠いのは鹿児島。宿泊は敷地内の「くまげら館」
 - ・2015年から福祉の立場からの地方創生事業に取り組む。
本人が望みさえすれば事業に参加出来る仕組み。プラチナバンク事業。
100歳も大丈夫。2900人の町で400人が登録している。
シルバーバンク 「こみっと」バンクと一緒にプラチナバンクに。
 - ・高齢でも口だけでも参加できます。参加者の機嫌を損ねないように。いろいろな方に宣伝。
 - ・効率を考えれば、できる人だけでやるのが良いが、みんなに参加してもらうことに。
足手纏いにならないように、プラチナスタッフを配置している。耳が聞こえない人もいる。

社協の職員

- ・地域福祉は52名。必死で勉強した。「こみっと」担当は一人。

◆所感◆

「藤里方式」とよばれる福祉事業のお話を伺った。
当初は「引きこもり支援の町」として大きな効果をだされており、そこが中心とっていたが、今では町の住民の多くが福祉事業に参加し、生きがいを感じているような印象を強く受けた。
「こみっと」と呼ばれる施設を作り、対象者を調査しチラシで情報を案内する作業が大きな柱と思うが、「待ちの姿勢ではなく、攻めの姿勢」がとても大切と感じた。
後年のプラチナバンク事業ではNHKのドキュメンタリー番組で紹介された録画を拝聴した。
様々な取組みの成功に、菊池会長の存在が大きかったと感じた。
事業主体がどこになるのかわからないが、浜田市で市民の方々に何ができるのか考え、できる取組みを関係者みんなで検討すべきと強く感じた。

埼玉県深谷市 アプローチルームの取組（不登校対策）

深谷市では本年度全小中学校（中学校10校 小学校19校）に校内教育支援センター「アプローチルーム」を設置。

同ルームにはサポートする「学校総合支援員」を配置し、児童生徒に合わせた学習支援を行っている。

登校はできるものの教室に入れなかったり、教室を離れたりする児童生徒に開放している。今年3月に文科省からこころプランが示されたが、その趣旨（学校ごとに教育支援センターを配置）に沿う先行した取組だった。

◆聞き取りから

- ・1つは学びの場所、もう一つは心の安定、居場所の意味で設置している。
- ・居場所から学習まで、段階的に子どもにあった支援を行っている。計画は関わってきた担任が作成。
- ・他にアプローチルームに行けない子に「いきいきスクール」（週5日 9時～15時）を別施設「深谷市教育研究所内」に開設。3名配置。（会計年度職員）
- ・当初、昼間開設していたが、夜の部「いきいきナイトスクール」（火・木18時から20時）を令和三年に開設。
- ・教員もない現場の苦しさ、親の苦しさもあった。
- ・当初、私費で令和2年から施行的に学校総合支援員を配置。平成20年から支援員を各中学校に配置していたがこれを移行した。3年、4年と増やし、昨年から小学校にも。
- ・ある程度成果が得られたので要項を定め、校内教育支援センターアプローチルームとした。
- ・空き教室、コンピュータ教室をアプローチルームに変えている学校も。
- ・支援員の確保は、平成20年度から配置している。退職した教員にお願いしている。
- ・小学校19校中16校が。（3校は該当者なし）中学校は10校。
- ・費用は月10万円。総合支援員26名配置。
- ・週4日1日5時間。年3千3百万円。（人件費）
- ・支援員は教員も免許を持っている人。
- ・総合支援員は月98千円。他の手当も。研修も行う。
- ・別に、私費で全中学校に教育相談対応の「教育相談員」を配置し、校区の小学校もカバーしている。
- ・アプローチルームのスペースは「学習、リラックス、作業スペース」を確保している。法改正もあり校長の認識も変わってきている。成果もでてきている。
- ・中学校の先生からは「入り浸るのでは」との懸念もあるが、社会的自立が目的と。

アプローチルーム利用の数

- ・令和4年度は215人、教室復帰は41人、学校に來れなかった子が來れるようになったのは、34人。
- ・令和5年度は小学校88人、中学校で98人、計186人。
- ・全校児童生徒はで小学校が6,719人、中学校で3,517人。
- ・不登校の率は去年から下がっている。
- ・親御さんの評価も高く、アプローチルームができて学校に行けるようになったと涙する親も。

- ・不登校で一番サポートしなければならないのは親御さん。
- ・不登校に寄り添う親の交流会を立ち上げ、年5回開催する（これまで3回開催）
- ・「自分たちと同じ、自分だけではなかった」など想いの交流。

◆所感◆

これまで視察した不登校対策の事例と同様に、子どもに合わせたメニューや取組がなされていた。

深谷市ではアプローチルーム、いきいきスクールの設置で、広く支援が出来る体制となっていると感じた。

文科省が示した「こころプラン」の取組（各学校に教育支援センターを配置）を先行して行っておられた。

浜田市での不登校対策に、大いに参考になる事例と感じた。